

CELからのメッセージ

大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所

所長 木全吉彦 *Written by Yoshihiko Kimata*



はじめに

2011年11月9日、大阪ガス本社ガスビル3階ホールで、エネルギー・文化研究所の設立25周年記念シンポジウム―CELからのメッセージ―「人」とつながり「から」持続可能な社会を

実現する」を開催しました。共同研究や季刊誌「CEL」への寄稿等で日頃からお世話になっている方々にご案内を差し上げたところ、約200名(当社グループ社員を含む)の方にご参加いただくことができました。熱心に研究員の発表に耳を傾けてくださった皆さまに心より感謝いたします。また、今回、ご欠席の方も含め、多くの方からお祝いや励ましのメッセージを頂戴しました。はがきへの手書きというアナログだからこそ、心のこもったひと言ひと言を所員とともにしっかつら胸に刻みつけました。

とりわけ、当方の無理なお願いをお聞き届けくださり、ビデオカメラに向かって、肉声で語っていただいた京都府立大学の太谷貴美子教授、京都大学の高田光雄教授、植田和弘教授、矢守克也教授、フリー・プロデューサーで大阪大学招聘教授の茶谷幸治氏

の5人の先生方には改めて御礼を申し上げます。

皆さまのご期待に応えられるよう所員一同今後も精一杯がんばる所存です。よろしくご指導のほどお願い申し上げます。

以下、各報告のポイントを述べた上で全体を総括し、「CELからのメッセージ」といたします。

エネルギー・文化研究所の25年を振り返る

志波 徹

1986年の設立から今日までの25年間、世界・日本の社会は大きく変化しました。当研究所は、ちょうど安定成長からバブル期への移行期に産声を上げ、バブル経済とその崩壊、その後の失われた20年をリアルタイムで見えてきたことになりました。

この間、表現は時々で変わるものの、エネルギー、生活・ライフスタイル、住まい・まちづくり、文化という大きな研究領域そのものは変わらずに今日に至っています。7人でスタートし、現在も10人という小規模な組織ですから、研究テーマはそれを担当する研究員個人の強み、バックグラウンドによって色づけが

変わります。しかし、その中で終始一貫しているのは、日本語の組織名には現れていない”生活“(CELのL)そして”生活者“の視点です。

また、設立当初から「CELは抽象的、観念的論文をきれいに つくるよりも、社会、人間、企業の現実の動きにつながるための 実験、実証を大切にする」と宣言していました。年を追うごとに 実証・実践的なテーマが立ち上がり、継続しているという実態から 見ると、この意図は達成できているのではないかと思います。

さらに、”外から見る“”外とつながる“もCELのアイデンティティです。今後ともさまざまなパートナーの皆さまとのつながりをテコとして、自ら保有する資源の数倍のアウトプットを出したいと考えています。

調理や火の生活文化の継承

山下 満智子

一世代前までは身近だった火と人間のつながりは、今や急速に希薄になりつつあります。生活における利便性、効率の向上という意味では進歩に違いないのですが、果たしてそれだけで良いのでしょうか。親から子、子から孫へと引き継がれてきた生活の記憶・歴史…そのすべてとは言いませんが、次代を担う子どもたちが、調理や火の生活文化をしつかり受け継ぐことができなければ、人としての生活力が失われ、持続可能な社会実現への大きな脅威となるのではないかと。そんな危機感から始まった研究です。

中でも”ガスだからできる“火育^{ひいく}への取り組みは今始まったばかりです。今後、多くの方々とながら、輪を広げて行きたいと思っています。

少子高齢時代と住まい

加茂 みどり

世界の人口は今や70億人を超え、地球規模で少子高齢化が進み

ます。トップランナーである日本がどう対応するのか、世界中の注目が集まっています。いわゆる「余生」が長くなり、結婚しない、あるいは子どもを持たない世帯も増え、家族の形はますます多様化していきます。当然のことながら生活拠点である住まいも対応を迫られることになります。

家族以外の外部からの支援や、個人の人的ネットワークの受け入れを可能にする住まいが必要とされ、一方では資源やエネルギーの制約により、今後100年、200年にわたって別々の家族が住み、社会ストックとして次世代へ引き継がれていく住宅が求められるのではないのでしょうか。スケルトン・インフィルの特性を活かしたNEXT21「住み継ぎの家」は、そんなに遠くない未来への現実的な提案だと考えています。

都市文化の価値の再認識とさらなる活用

栗本 智代

時の流れとともに風化してしまいがちな都市の文化に着目し、その発掘・伝承・活用に取り組む、CELの研究・実践活動の中でも特にユニークなテーマです。「なにわの語りべ」は、コンテンツもさることながら、語り、映像、音楽、時には芝居、ファッションショーと、五感に訴えるプレゼンテーションに特徴があります。残念ながら、シンポジウムでは時間や会場の制約の中での披露となり、また、著作権の関係で、ホームページ上で再現することもできませんが、是非一度、本格的な公演をご覧になって、楽しく、気軽に歴史や文化に触れていただきたいと思います。

「まち歩き」は、手軽にできて、アタマとカラダの健康増進に役立つ都市型のレジャーです。案内人のサポートを受けてまちを再発見する楽しさに、今後も人気が高まって行くと考えます。こうした活動を通じて多くの人が「まち」とつながることで、都市の魅力が発見され、ブランド力が高まり、さらに多くの人を惹きつけます。現在、さまざまな主体が活動を行っていますが、今後は

それをつなぐためのプラットフォームを、いかに具現化するかという課題に挑戦します。

生活経営のすすめ

豊田 尚吾

生活環境の悪化に対し、生活者も、経営者が企業を経営するのと同じように、「生活を経営する」ことが大切であるという提言です。家計を管理するだけでなく、災害や失業に備えたりリスク管理や、能力開発など中長期的な投資を行うことも必要となります。

東日本大震災直後、多額の義捐金が寄せられ、多くのボランティアが被災地に入りました。自治体による対口支援や個人から個人への支援、ふるさと納税など、さまざまな仕組みが利用され、生活者同士の連帯の絆は確実に強くなりました。近年、「自分だけ良ければいい」という「部分最適」が蔓延し、モンスター・ペアレントやモンスター・カスタマーを生み出してきました。しかし一方では、「世のため人のため」、利己的でなく利他的な「全体最適」を意識した行動も広がっています。「倫理的消費」の広がりは、市民社会の成熟の表われであり、今後の企業活動にも大きな影響を及ぼすと考えられます。

これからのエネルギーと環境

当麻 潔

大震災は、これまで見えなかった日本社会の脆弱性を露わにしました。エネルギーの供給基盤です。一次エネルギー需給の逼迫は過去にもありましたが、今回は二次エネルギーである電気の供給安定が損なわれました。これに対し、再生可能エネルギーの導入促進という「足し算」もさることながら、省エネルギーという「引き算」、負荷平準化やエネルギー供給構造改革といった「組み換え」などさまざまなアプローチが検討されています。しかし大

切なのは、生活者のライフスタイル、ワークスタイルが蚊帳の外になってはならないということです。

インフラ、制度、技術に生活者も含めて、いわば人を中心にした全体最適のシステムを探るべきだと思います。CELとしても供給者論理でない、生活者視点に立ったエネルギーのありようについて、さらに研究を深め、発信してまいります。

地域資源を活かす”つながり”の再デザイン

弘本 由香里

生活や地域、社会を支える目に見えない絆が”つながり”です。元々「まち」や「むら」が成立する前後には、職・住は一体化し、人と地域の絆はおのずと形成されてきました。地域に根ざしたさまざまな祭りや行事もその絆を強める役割を果たしたことと思います。ところが、都市化が進み、格差拡大、少子高齢化が地域にさまざまな影響を及ぼすにつれ、このつながりは弱体化しています。

そんな中、2007年、NEXT21のある上町台地の豊かな自然や環境、歴史や生活文化を材料に、さまざまな地域の人々や機関、専門家がつながって”つながり”を再生するいわば「絆の結び直し」プロジェクトが始まったのです。阪神・淡路大震災からの教訓も織り込んで、コミュニティレベルでできる「減災」もテーマとして取り上げ、反響を呼びました。

「”つながり”の再デザイン」は本シンポジウムを貫く共通テーマでもあります。

まとめ

いうまでもなく、各テーマはそれぞれに背景と歴史を持ち、各分野の専門家の皆さんや、関係者の方々とともに積み上げてきたものであって、「人」と”つながり”から持続可能な社会を実現

する」という旗のもとに整然と並んでいるわけではありません。

しかし、各テーマに共通しているのは、持続可能な社会を実現するための課題を解決するには、縦割り、分担、深掘りではなく、横断的、協力、統合が必要であり、効率的であるということです。

防災・減災において「自助」、「公助」には限界がある一方、「共助」には潜在的な——ある意味では無限の——可能性があることを想起するとわかりやすいでしょうか。これが空間軸での解決の方向性であるとすれば、次に時間軸で考えると、過去からの「生活文化」や「知恵」を未来へ引き継ぐ、つなぐことが、現在を生きるわれわれの大切な役割だということになります。基本は家族ですが、多様化する家族の形を考えると、それだけに頼るわけにはいきません。ここにもコミュニティにおける共助的な活動の余地が広がっているのではないのでしょうか。

東日本大震災について

東日本大震災の発生によって、コミュニティや人の絆・つながりの重要性が再認識され、「時の言葉」となった感があります（大方の予想通り、2011年の漢字は「絆」でした）。しかし、実は、震災以前から日本の社会が抱える弱点だったものが、一気にあぶりだされたと見るべきでしょう。ちなみに、今回のシンポジウムのテーマ「人」とつながり「から持続可能な社会を実現する」は、本シンポジウムの企画が本格的に始まった09年11月頃にはほぼ固まっていた（元々の計画では11年の5月18日に開催する予定で、案内状のチェックや報告内容の確認などをしていた時に震災が起こったのです）。

東北地方では過去の大地震・大津波に学び、取るべ

き行動が伝えられていたはずでした。さらに、都会に比べれば強い、よく組織されたコミュニティがあったにもかかわらず、多くの町や村で、薄れてゆく過去の災害の記憶をつなぎとめることができなかつたのです。

「天災は忘れた頃にやってくる」という寺田寅彦の洞察、それ自体は正しいとして、私たちは、忘れた頃にやってくる天災にどう向き合えばよいのでしょうか。人間が忘れても、ちゃんと守ってくれる完全無欠のハードを構築するのではなく、一人ひとりが「自ら助くる者」となること、その上で人と人、人とコミュニティが、平時からつながり、折に触れてそのつながりを確認する機会を持つこと、そして、各家庭で、いのち、くらしの大切さを言い聞かせ、語り継いで行くことが大切なのではないのでしょうか。

結びに代えて

CELも25歳。働き盛りにはあと一歩でも、責任ある一人前の大人です。これまで育てていただいた皆さまに心から感謝するとともに、少しでも恩返しできるよう、所員一同、気持ちを新たにしています。

世の中は刻々と変化しますが、行く手の視界は開けず、足元もおぼつきません。私たちCELは、生活者の視点に立った、エネルギー・環境、住まい・生活、都市・コミュニティに関する研究・実践・提言を行い、たとえほのかであっても進むべき道を照らし続ける常灯明でありたいと思います。

まずは5年後の「而立^{じりつ}」を目指してチャレンジするCELを、今後とも暖かく見守り、時に厳しく叱咤激励していただきますよう、心よりお願い申し上げます。